

ともに生きる ともに創る 共生共創通信

VOL.15

個性、
とことん
舞台、
とことん
ぞくぞく。
ともに生きる ともに創る
共生共創事業

茅ヶ崎市
特集号

共生社会の実現を リングから訴える



「共生プロレス」——
茅ヶ崎支援学校の教諭が取り組む
「共生プロレス」——
チームリングとともに颯爽と登場する、
覆面のヒーロー。胸には「ともに生きる」の
文字。ヒールレスラーの乱入に場内はざわ
つく。「お互いを知るためにプロレスをし
よう」レフェリーに促されて対決が始まり
ます。技がかけられるたびに客席はどよ
めき、声援を送る。ヒーローの必殺技が
決まると、拍手が沸き起こり、いつの間
にか客席と会場が一体となっていました。
「共生プロレス」と銘打つ活動を行うの
は、神奈川県立茅ヶ崎支援学校の教諭た
ち。地域のマルシェやイベントなどに参加
し、プロレスを行っています。
応援にかけた生徒や保護者、さらに
地域の方がリングとなるマットレスの周り
を囲みます。「年齢や障がいの有無を超えた
様々な人たちがマットの周りに輪ができる。
ここに仮の共生社会ができあがるんです。
私達にとっては、マットの上ではなく、こう
していきたい」と共生プロレスの発起人、
同校総括教諭の小川和豊さんは語ります。



横須賀シニア劇団「よっしゃ!!」第6回公演 レトロシアター vol.I『あおげあおげ』『かさじぞう』

横須賀中央駅から緩やかな坂を登ってたどり着いた、横須賀市立青少年会館。ホールに設えられたシンプルな舞台と観客席は、開演前から和やかな雰囲気になっていました。2019年に設立された「よっしゃ!!」は団員が全員60歳以上。今回出演するのは25名。観客はそのお友達、ご家族、お知り合いの方が多いのか会場での会話も弾みます。

1話目は狂言『ぶす』をアレンジした、和尚様ととんち坊主の話『あおげあおげ』。分かりやすくも、狂言らしいしぐさも生かした演出で、和尚に手をつけてはいけないと言われていた壺の中身(実は水飴)をあつという間に平らげてしまう坊主の様子は笑いを誘っていました。

2話目『かさじぞう』も楽しい演出がたくさん。爺様が「誰かに似てないか?」と地蔵に語りかける場面では、五月み

どりさん、黒柳徹子さんなどの名前や、この頃ワイドショーを賑わせていた方の名前も。皆が知っている話も、このようにして今を楽しむ術が加わるのが芸能の魅力だと感じるひと時でした。パンフレットに並ぶ劇団員のコメント「心豊かな爺様と婆様。2人の世界観を表現したい。」「かわいのお地蔵さん役。童心に帰って楽しめます。」といった言葉も印象に残りました。

(橋本)



撮影：長谷川健太郎

神奈川県では、年齢や障がいなどにかかわらず、
すべての人が舞台芸術に参加し楽しめる「共生共創事業」を実施しています。

2023年度神奈川県 共生共創事業 今後のラインアップ

2023年12月2日(土)、3日(日) 演劇
綾瀬シニア劇団 Hale
第4回公演『タイトル未定』
綾瀬市オーエンス文化会館 大ホール

2024年1月27日(土) ダンス
チャレンジ・オブ・ザ・シルバー
成果発表公演『タイトル未定』
小田原三の丸ホール 小ホール

2024年2月2日(金)、3日(土) 演劇
小田原シニア劇団チリアクオールディーズ
『タイトル未定』
小田原三の丸ホール 小ホール

2024年2月上旬(予定) 影絵・映像
やまゆり園×劇団かかし座
『影絵であそぶ2023』(仮)
オンライン配信

2024年2月下旬(予定) 音楽・映像
スプラウト×岩鍋久美子
『音の探検隊2023』(仮)
オンライン配信

特別公演 ※会場周辺の特別支援学校貸切公演
2023年9月12日(火) 音楽
『みんなのスマイル・コンサート』
茅ヶ崎市民文化会館 大ホール

自主公演
2024年3月23日(土)、24日(日) 演劇
横須賀シニア劇団「よっしゃ!!」第7回公演『EMクラブ』
ヨコスカ・ベイサイド・ポケット

お問い合わせ
公益財団法人神奈川県芸術文化財団 電話 045-306-6811(平日 10:00~18:00)
社会連携ポータル課 ファックス 045-663-3714
〒231-0023 横浜市中区山下町3-1 メール kyoso@kanagawa-af.org
神奈川県民ホール内

<https://kyosei-kyoso.jp>



主催 神奈川県 企画製作 公益財団法人神奈川県芸術文化財団 編集・ライター：橋本誠、福井尚子 デザイン：水澤充 (MYG round inc.)



ともに生きる社会
かながわ憲章
KANAGAWA CHARTER for an Inclusive Society

ME-BYO®

公益財団法人
神奈川県芸術文化財団



令和5年度 文化庁
文化芸術創造拠点
形成事業

神奈川県あそび歌プロジェクト

『世界のうたとあそぼう!』

振付家のホナガヨウコさん、音楽家の3日満月（権頭真由さん、佐藤公哉さん）に活動についてうかがいました。



Q1 コロナ禍に始まった本プロジェクト。どのように活動を進めてきましたか？

ホナガ：想定外のスタートでしたが、オンラインでやり取りを重ねて、実際に集まれるタイミングで、神奈川県に住在している外国にルーツのある方から直接、あそび歌を教わるところから始めました。

権頭：たくさんの歌を教えていただくなかで、現地の言葉の響きが面白いものや、今の子どもも共感できそうなもの、掛け合いするシーンがあるなど、様々なエッセンスが入っているものを選んで映像にしていきました。

Q2 「あそび歌」をどのようにアレンジしていますか？

ホナガ：演者もスタッフも一緒に、実際に試しながらつくっています。遊んでみて楽しいかどうか、ということが一番大切にしています。

佐藤：全て日本語に訳すのではなく、現地の言葉の響きが面白いものは残したり、動きが複雑なところにアレンジを加えています。いろんな人達が遊んでくれて、さらに遊び方を変えながら広まっていくといいなと思っています。

Q3 体験型コンサート(8月に開催)はどのような内容でしたか？

権頭：コロナ禍による制限が緩和されてきたので、今回はお客さんが参加できる場面が増えました。一緒に踊ってみたり、歌ってみたり、体験を持ち帰ってもらうこと

体験型コンサート(2023年8月6日/県民共済みらいホール)の様子。撮影：吉田周平



体験型コンサート(2023年8月6日)に向けた稽古の様子。それぞれ主要な役割はありながらも、それを超えてアイデアを出しあいながら完成度をあげていきます。撮影：加藤甫

ができていたら嬉しいです。

ホナガ：2月に開催した時よりも曲数や体験できる時間を増やしました。劇場だけでなく、客席も含めた全員の遊び場になるような空間づくりを目指しました。

Q4 それぞれの役割のなかで、どのようなところにこだわってコンサートをつくっていますか？

佐藤：それぞれの国で実際に使われている民族楽器なるべく取り寄せて使うようにしています。国や地域によって異なる音色の色彩を少しでも感じてもらえるようにできたらいいですね。

権頭：アコーディオンなどの楽器を担当しているので、印象に残るメロディをしっかりと伝えようとしています。また、楽しむ心と童心を忘れないようにしています。

ホナガ：踊りには生活感や文化的な背景が現れるので、ひとつの地域にまつわる踊りを1曲だけではなくいくつか踊ってみながら、動きの特徴を掴むようにしています。

Q5 今後の展開を教えてください。

ホナガ：来年2月にイベント出演を予定しています。他にも、まだまだ県内にいる外国にルーツのある方をリサーチしたり、あそび歌を映像に残したりなど、様々な形で活動を展開していきたいです。外国にルーツのある方に出会ったときにその国のあそび歌を一曲知っているということから仲良くなれるかもしれない。文化を通してお互いの理解へつながるといいですね。

神奈川県あそび歌プロジェクトとは

日本で暮らす子どもたちが誰でも楽しめるように世界の「あそび歌」の歌詞や振付をアレンジして、多文化の魅力を発信するプロジェクト。レクチャー動画を配信し、歌詞や振付をイラスト付きのリーフレットで紹介することから活動を開始。一つの地域について掘り下げ、あそび歌を通した学びを提供するワークショップを幼稚園や学童などで展開。また、チームがリサーチした様々な楽曲で遊ぶことができる体験型のコンサートを今年2月と8月に実施しました。

共生共創通信 共生社会の実現を リングから訴える



相手を受け止めることから始まるプロレスから広がる共生の輪

茅ヶ崎市の西北、西久保に所在する茅ヶ崎支援学校。肢体不自由教育部門と知的障害教育部門があり、小学部から高等部まで約200名の児童・生徒が在籍しています。開校は1999年。20年以上経ちますが、地域の人に病院や高齢者施設に間違えられるなど、学校の存在が知られていないことに課題を感じていました。「やがて子どもたちが出ていく地域社会の中で知られていないということは、彼らが地域で暮らすハードルをあげるようになってしまおうと思ったんです」と話す小川さん。学校のことを知ってもらう手段を考えていたところ出会ったのが、地域活性化を謳って活動する「ちがさきプロレス」でした。

「支援学校にゆかりのある覆面レスラーを登場させることで、同校のことを知ってもらうきっかけになるのでは」。そう考えていた矢先、プロレスラーを目指していた同校の若手教諭に出会います。教員たち自らがレスラーに扮し、「共生プロレス」と銘打った活動を始めることにしました。

そこで誕生したのが、ヒーローレスラー・きらめキッド。名前は、同校の校歌の歌詞や文化祭の名称に使われている馴染みのあるワード「きらめき」に由来しています。子どもたちのきらめきをまとうって、共生社会をリングから訴えていくヒーローレスラーです。

音楽の先生が楽曲をつくり、レゲエシナガの先生が作詞を担当。「一人ひとり違うから良い リスペクトでつながれば良い」共生社会を願ってつくられた歌は、

一度聞いたら忘れられないメロデーです。

「どうしてプロレス？」と聞かれることもあります。「プロレスはお互いを知らないで試合にならない。まずは相手を受け止めるところから始まって、何度もぶつかりあいながらも理解を深めていく。違いを認め合いながらつながるところが共生社会と通じるところがあります」と話すのは、同校の共生社会推進専任教諭で、ヒーロー・きらめキッドとしても活躍する徳永翔さん。選手が観客の反応を引き出しながら試合を進めるプロレスは、リングの上だけではなくリングを囲む様々な人と一緒につくりあげるものです。プロレスを行うことで、リングの周りに集まった人が障がいの程度や状態にかかわらず一体となることに、共生社会実現への希望を感じていると言います。

試合の前説では、学校の紹介とともに、共生社会の大切さや、防災の知識、さらに人権についても伝えます。茅ヶ崎の民話「河童徳利」に由来した名前を持つレ

スラー、カップトック・リーが訴えるのは、ゴミ問題や自然環境の大切さ。堅苦しくなく、伝えるのがモットーです。

回を重ねるごにお客さんも増え、学校の児童・生徒のほか、保護者や卒業生も噂を聞きつけて来場するようになるなど、手応えを感じています。

「これからも学校を知ってもらうとともに、様々な人が共に生きる社会を推進していきたい。やがて子どもたちが暮らすしやすい地域へとつながれば」と徳永さんは言葉に力を込めます。

今後もマルシェやイベントへの参加を予定している「共生プロレス」。多様な人や地域と関わりながら、共生の輪のさらなる広がりを目指しています。



校長・柏木雅彦先生コメント

子どもたちが地域の企業や社会福祉施設、イベントに参加できる、学びの場を開拓しています。生徒が育てたサツマイモを使って、茅ヶ崎で人気のアイスクリーム・プレンティーズさんが限定商品を製造した取り組みもそのひとつ。子どもたちが地域に溶け込んでいくことで、地域の共生社会への理解につながっていくように願っています。